

スケート国体、青森県八戸市で開催

国体の名称は今年が最後に

国民体育大会の冬季大会スケート・アイスホッケー競技会は1月28日から5日まで、青森県八戸市で開催された。2020年に鹿児島県で本大会を開催予定だった第75回国民体育大会が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止となり、今年に開催が延期されたことにより、今年には大会名に回数を入れない「特別国体」となった。来年の佐賀県での大会から名称が「国民スポーツ大会」に変更されるため、

「国民体育大会」の名称は今年が最後となる。

競技では、フィギュアスケート、ショートトラック、スピードスケート、アイスホッケーでそれぞれ熱戦が繰り広げられた。フィギュアスケートの成年女子は、坂本花織選手



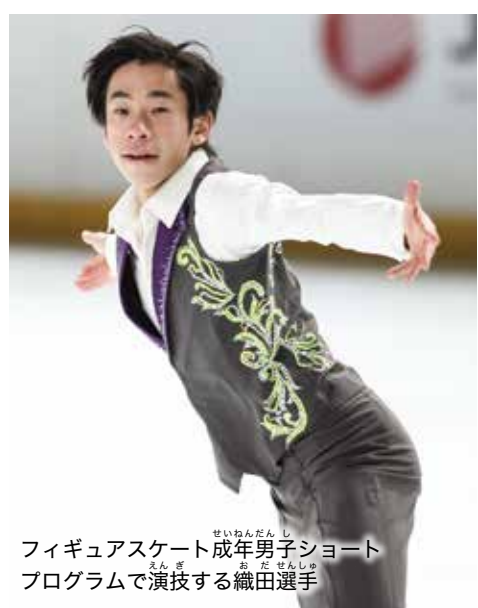
ショートトラック成年男子500メートルで滑走する選手たち



フィギュアスケート成年女子フリーで演技する坂本選手。JSP0

が合計238・63点の高得点で1位、さらに3位に入った三原舞依選手擁する兵庫県が優勝した。成年男子では、10年バンクーバー冬季五輪代表で今季から競技に復帰した織田信成選手（大阪府）の出場が話題になった。

スキー国体は、17日から20日まで岩手県八幡平市で行われる。



フィギュアスケート成年男子ショートプログラムで演技する織田選手

女子ジャンプで日本が初の表彰台独占

ノルディックスキースキーのワールドカップ（W杯）女子ジャンプは5日、ドイツのベリンゲンで個人第17戦が行われ、伊藤有希選手が137メートルと135.5メートルを飛び、合計233・3点で6シーズンぶりの優勝を遂げた。丸山希選手が自己最高の2位に入り、高梨沙羅選手も2戦連続の3位となり、2011〜12年シーズンに始まったW杯女子で初めて日本勢が表彰台を独占した。今季の日本女子の優勝も初めて。

17年3月12日以来の1位となつて通算6勝目を挙げた伊藤選手は「歴史的な一日になった。今まで勝つた中で、初優勝の時と同じくらいうれしい」と全体で喜びを表した。



優勝して笑顔の伊藤選手（中央）、2位の丸山選手（左端）、3位の高梨選手（AFP時事）

落合が1場所で十両に昇進

昭和以降では初の快挙



幕下優勝の落合（代表撮影）

大相撲の幕下15枚目格付け出で初場所（1月、東京）にプロデビューした落合（本名は落合哲也）が7戦全勝した結果、3月の春場所（大阪）で新十両に昇進することが1月25日に決まった。デビューから1場所ですぐに十両に昇進したのは、昭和以降では初めて。

鳥取城北高で高校横綱に輝き、昨年の全日本実業団選手権

を制した19歳の落合は、アマチュア時代の実績によって幕下15枚目の地位でスタート。幕下15枚目以内で全勝優勝すると十両に昇進できるという

内規により、日本相撲協会の番付編成会議で昇進が決まった。元横綱白鵬が昨年7月に部屋を継承したばかりの宮城野部屋から初の新十両誕生となった。

落合は「うれしい。これから頑張らないといけない、という身が引き締まる思いがある。横綱になる夢をいつかなえたい」と喜びと抱負を話した。

都道府県駅伝

中学生、高校生を含むチームで編成する全国都道府県駅伝は、女子が大阪、男子は長野がそれぞれ優勝した。

女子は1月15日、たけびしスタジアム京都を発着点とする9区間42・195キロのコースで行われ、大阪が2時間15分48秒で8年ぶり4度目の栄冠。大阪はトップから5秒差の3位でたすきを受けた最終9区（10キロ）の松田瑞生選手が、中間点の5キロすぎでトップに立ち、3連覇を目指した2位の京都に49秒差をつけてゴールした。松田選手は「前が見える位置ならいけると思っていた」と会心の走りを振り返った。



ゴールする大阪のアンカー松田選手

女子は大阪が8年ぶり栄冠

男子は長野が最多9度目の優勝

な走りで17人抜きの快走。従来の区間記録を8秒更新する9分2秒の新記録をマークした。ドルーリー選手は「体が軽かった。こんな大舞台で走れて気持ちよかった」と笑顔で話した。

男子は1月22日、広島市の平和記念公園前を発着点とする7区間48キロのコースで行われ、長野が2時間17分10秒の大会新記録で前回開催された2020年大会に続いて制し、最多の優勝回数を9に伸ばした。



区間賞のトロフィーを掲げる岡山のドルーリー朱瑛里選手



4区、中継所手前でトップ争いをする長野の山口選手（右）（代表撮影）